

第二次世界大戦前の新教育運動の展開に関する一考察

— 今宮千勝（1894–1974）の教育思想に着目して —

A study of new educational movement before the Second World War: By paying attention to educational thought of Imamiya Chikatsu (1894-1974)

国谷直己

Naoki Kuniya

1. 問題意識と課題

本稿の課題は、茨城県における昭和戦前の教育の動向を概観しながら、当県教育界における新教育運動実践家として評価される今宮千勝¹の教育活動を再考することにある。この課題を設定した理由は、大正・昭和初期に新教育運動が衰退していく様相において、東京都、千葉県、奈良県、長野県²などの研究は散見するが、管見するところ、日本精神の発信地ともいえる茨城県の研究が進んでいないからである。たとえば、1931（昭和6）年の満州事変を契機とした1932（昭和7）年、1933（昭和8）年ごろを境に新教育運動家たちがファシズムへ迎合する様相が、谷本富や野村芳兵衛³、木下竹次、小原國芳⁴などに見られるのは周知の通りである。前者の全都三県では、新教育が盛んに行われていたことで研究の対象とされてきたのだろう。茨城県でも、隣県の千葉県師範学校において展開された「自由教育」の研究会が計画されたが、自由教育を忌み嫌う守屋源次郎知事による弾圧

によってそれが広まることはなかった。しかし、千葉県に隣接する利根川沿いの県南地区や県西地区⁵のような農村部においては、偏知主義の画一的な教授法から打破しようと、小学校の訓導たちにおける自主的な民間レベルの新教育運動がみられたのである。

茨城県は、水戸学に立脚した教育的先進地域のような自負のもと、「文教茨城」といった俗語が県内に流布するほどの地域である。それは、徳川光圀の『大日本史』編纂以降、明治時代においても教育勅語煥発が明治天皇の水戸行幸の翌日といった偶然も重なって、「国民教育」の素地に水戸学があり、それが茨城県教育の「誇り」であるといった県民性が大正・昭和においても見受けられたことは、ほとんど間違いはない事実であろう。したがって、茨城県における大正・昭和初期の新教育運動を実践することは、水戸学の影響をうけた茨城県教育界では容易なことではなかったようであるが、どの程度水戸学の影響を受けて、どのように困難であったの

か、今日までほとんどそれらの解明がなされていないのである。

2. 茨城県における新教育運動の様相

明治時代末期より大正時代を経て戦前にいたる日本の教育を、教育活動進展期として考察すると、1907（明治40）年の義務教育年限延長を契機として、教育の施設、内容、方法等が大きく転換した時代と捉えることができる。とくに注目すべきことは、世界第一次大戦の結果によって国民の目は国際社会へ向けられ、いわゆる新教育運動と称する教育革新運動が起こったことである。この運動は全国的に展開され教育界に清新の生命を与え、義務教育年限延長と相まって、初等普通教育が一大伸展を遂げたのである。しかしながら、かくはなばなく展開された新教育運動も、その後の東亜の国際情勢はその発展を阻止する結果となり、1930（昭和5）年、1931（昭和6）年を境として、やむなき方向転換を迫られたのである。

茨城県における新教育も、『茨城県教育史』にあるように、従来の教育を打破する教育改革が唱えられるようになった痕跡は、茨城県教育会発行の雑誌「茨城教育」の「大礼記念号〔1915（大正4）年11月10日〕」における論文あたりから見受けられる⁶。そして、1920（大正9）年4月1日には「教育改造号」を刊行し教育の転換の風潮は高まる。しかし、翌年5月10日には「自由教育批判号」が刊行され、新教育に関する論文が「茨城教育」に掲載されるようになったのは、それより更に後のことである。茨城県の新教育運動を概観すると次のようになる。

新教育運動に対する大事件の一つとして、隣

県の千葉県師範学校附属小学校において行われていた「自由教育」が茨城県で試行されるにあたって、県知事の守屋源次郎による弾圧により不発に終わったのは有名である⁷。「八大教育主張講演」のうちの一人、手塚岸衛千葉県師範学校附属小学校主事と同校教諭の中島義一らを招き、1921（大正10）年12月28日から同30日にかけて「自由教育研究会」が中島と茨城県師範学校で同期だった湯澤卯吉主席訓導を中心とした石下尋常高等小学校の教師たちによって計画された。しかし、「自由教育」を危険視する県当局はこれの中止を命じた。ところが、その3ヶ月後の1922（大正11）年3月5日に、菊池謙二郎を会長とする水戸市教育会は、水戸市で手塚、中島を講師とする自由教育講演会を開催した。県当局は、水戸市内の小学校長を集めて、講演会への教員の出席禁止を指示するとともに、各郡へも聴講を差し控えるように通達したのである。したがって、当日は水戸市内の小学校教員の姿はなく、講演会場を私服刑事が徘徊するといった異常な光景であった。

当時の茨城県知事守屋源次郎は、1921（大正10）年の春、茨城県師範学校附属小学校主事若月秀吉および同女子師範学校附属小学校主事小川清喜蔵の両名に、千葉県師範学校附属小学校を視察させ、同年5月の郡市長会議の席上において調査報告させた。それは、自由教育は本県には適さないという内容であり、さらに茨城県教育会は機関誌「茨城教育」第441号〔1921（大正10）年4月15日〕において自由教育批判の論文投稿を求め、翌月の第442号は、「自由教育批判号」と題して若月・小川両師範学校附属小学校主事をはじめとする10の論文が掲載された⁸。

地方紙「いはらき」には「守屋知事の自由教育批判」と題する記事が7回にわたって掲載⁹され、「湯澤訓導の意見書」¹⁰や「湯澤氏に対する当局の措置」¹¹「所謂自由教育 県当局の方針」¹²などといった記事も見られ、自由教育に対する県当局の態度や姿勢が大きく取りざたされる。対して中島は「いはらき」紙上において、自由教育の信念を披瀝し、手塚も東京日日新聞紙上で二度にわたって茨城県当局に対して反論したのだった¹³。

これらの論争に対して、文部省の塚原政次督学官は自由教育擁護の立場をとり、また1921年の夏、政府の義務教育費削減政策に反対するために野口援太郎や下中弥三郎らを中心として結成された教育擁護同盟は、その真相を調査・究明するために1922（大正11）年1月に同盟の一人を現地に派遣し、守屋知事の態度が職権濫用であるとしてきびしく批判した¹⁴。このあたりから、「茨城教育」の誌面上に自由な教育に関する論考がわずかではあるが散見できる。さらに、1923（大正12）年3月4日には、澤柳政太郎の講演が行われ、従来の教育を改造すべく欧米の教育に焦点を当てた新教育思想を高唱する動きも見られてきた¹⁵。

そして昭和に入ると、飯塚巳代次（稲・大須賀小）「低学年に於ける体験教育」¹⁶、高橋熙（稲・金江津小）「体験教育の理論及実際」¹⁷、同人「体験教育の一考察（現象学的考察）」¹⁸、同人「我等の個性教育論」¹⁹、加藤・市毛・宮田・浜口・室町・大瀧「個性尊重及職業指導に関する講習会報告」²⁰、小松崎軍次（稲・江戸崎小）「高等小学校の体験教育」²¹などの論文が掲載されるようになる。「稲」とは、茨城県

南にある稲敷郡（現在の稲敷市や河内町にあたる）のことで、それに属する小学校において盛んに行われた体験教育が茨城県における新教育運動の中心地だったと、黒田正²²は振り返る。とくに「稲敷郡同好会」は、昭和初頭のころに本格的に新教育運動に着手し、同好会の会長高橋熙が五校連合新教育研究会（金江津小学校、大須賀小学校、太田小学校、源清田小学校、大宮小学校）を結成してから約十年の間、盛んだったようである。高橋は、1925（大正14）年8月31日に金江津小学校長に赴任すると、生命一元主義の立場から体験教育を実施して、従来の教育組織の改造を行った。教育の根本にディルタイ派の「生命」観を置き、哲学的基礎のうえに立って明治教育改造運動に傾倒し、県下の進歩的精神をもつ青年教師を指導した。「生活を哲学する」という言葉も流行し、中島義一の『子ども哲学叢書』を教師、子ども、その親も一緒に愛読したようである。また、金江津小学校を会場として理論では入澤宗寿、稲毛詛風等の哲学講座を開催、実践は山崎博²³を招聘して講習会を開いて指導を受けた²⁴。大須賀小学校における飯塚巳代次の体験教育もまた、高橋の実践に大きく影響を受けたものだった。1927（昭和2）年ごろから大須賀校で体験教育を実施し、1931（昭和6）年12月に『生命体験の教育』（文教書院）を刊行している。この県南地区の稲敷郡は、利根川を隔てて千葉県に接する地域で、県当局の抑圧もあり実践には踏み切れなかったが、自由教育に触発されていたことは間違いがない。さらに、相次ぐ利根川の氾濫から農作物が水害に見舞われ、教師も子どもも困窮のなか、子どもの実体験に即した生活体験型の教育を求

めていたと考えられる。このように、一方で県南地区において盛んに行われた体験教育ではあったが、他方、県北地区においてもその実践が見られた。県北地区は水戸を中心として革新的な思想や実践を拒む傾向にあるが、男女両師範学校の職員のなかにも世界の教育動向に関心をもっていた新教育思想家もいた。茨城県師範学校附属小学校訓導兼茨城県師範学校教諭の今宮千勝（1894-1974）はその一人である。今宮は1928（昭和3）年4月に『生命伸展の教育』（文教書院）を著し、同年10月には『生命の学級経営』を刊行している。この原理と実践論を実施したのが、県北地区の天津小学校と、県西地区の騰波の江小学校である。天津小学校は現在の北茨城市に位置し、「小室設校長の教育観の基調をなすものは今宮の『生命伸展の教育』であり、学級経営については同じく今宮の『生命の学級経営』を唯一の根拠として、忠実にこれを実施していた」²⁵のである。今宮自身も来校して指導にあたることも多く、今宮の実験校のような様相を呈していたようである。

3. 今宮千勝とは

黒田正は茨城県における新教育運動家の中心人物の一人として今宮千勝を挙げる。今宮は、1928（昭和3）年7月に処女作『生命伸展の教育』を著した。「生命」とはデイルタイ（Wilhelm Christian Ludwig Dilthey, 1833-1911）の精神科学に依拠した生命観であり、客観的価値や対象を生るの表現であるとし、それらを吸収、そして内部的に批判・反省を繰り返すことで新しい価値を創造し、それを通して人間は伸展するといった教育観である。本県教育界で教本のよ

うなものを受け止められていた地域もあったが、実は本県よりも関西、中国、九州地方で有名だったようである²⁶。さらに、これは教育原理を目的としたもので、同年10月には、その理論に対する方法論といった『生命の学級経営』も刊行されている。今宮は、当時著されていた教育学研究に関する著作等が師範学校生や現職の教員にとって難解なものが多いので、彼らが理解、実践できるようにという姿勢のもとそれらの著作を刊行したのである。

しかし、『生命伸展の教育』発刊からの1年半後、1929（昭和4）年10月には、『純粹日本教育原理』を著し、海外の教育法・教育論を直輸入している日本の教育事情に警鐘を鳴らし、それらを排斥はしないが日本古来の文化および神にもとづいた、日本の「個性」を尊重した教育を行うべきであると説いた。さらに徳川光圀の「我が君主は天子なり」を引用して水戸学を前面に押し出した国家共同体としての教育も重要と考えていた。今宮は、翌年の1930（昭和5）年4月から茨城県師範学校教諭になり、1933（昭和8）年から、国民精神文化研究所の教員研修科に入所し、吉田熊次や海後宗臣などの教育理論の研究に勤しむ。その研究成果として1932（昭和7）年に『日本精神の訓育』を著す。1936（昭和11）年3月には梅根悟の後任として茨城県師範学校附属小学校主事に任命され、3年後の1939（昭和14）年5月31日には、彼がまとめ役となって茨城師範学校・女子師範学校編『綜合郷土研究』（上・中・下全3巻）が刊行された。同年9月20日には「茨城県教育綱領」が制定され、今宮はその起草委員として中心メンバーの一人であった。『綜合郷土研究』の教育の章や

県教育綱領は、「水戸学を中心として、広く郷土にみなぎる伝統的精神に基き、わが国の現在及び将来の教育の帰趨を案じ、県民性の長短を吟味勘案し、あるべき茨城教育の理想像を描いて、教育の一大金字塔をと、情熱をたぎらせ、思索をねった」²⁷ものであった。その後今宮は、県教育綱領の発布を契機に終戦まで県視学、県視学官といった立場から当県教育界に携わるようになる。文部省から他県師範学校の校長に二度推薦されたが、当時の茨城県知事に熱心に引き留められ、その生涯を茨城県の教育に捧げることになった。終戦後は、茨城県土浦中学校校長に任命されたが、当県視学官といった立場を主に、『純粹日本教育原理』と『日本精神の訓育』の2著、さらに雑誌に掲載された論文などが問題となったようで、その職を追われたのである。

4. まとめと今後の課題

これまでみてきたように、茨城県における新教育運動は、まず「自由教育抑圧事件」の影響があり、はなばなしく展開されることはなかった。その後、文部省の調査によって守屋知事が非難されると、画一的・静的教育を打破しようとする教育活動が徐々に高まりを見せ始めたのである。特にディルタイの「生命」観に基づいた体験的教育を研究、実践する学校や地域が散見するようになる。そのなかでも、今宮の存在は大きかったようで、彼の『生命伸展の教育』と『生命の学級経営』が教本となっていた。今宮は、関東大震災や昭和恐慌などが要因となった社会的混乱のなかで、教育活動に困難を抱えていた教育者を資するといった信念のもと学術的な教育思想を具現化したのである。ここまで

は、当県教育界で新教育運動が発展することが困難だった理由として水戸学の影響が大きかったという痕跡は見当たらない。

しかし、今宮が前述の2著の発刊から間もなくして著した『純粹日本教育原理』は、水戸学に立脚した日本主義・国粹主義的教育が前面に押し出されたものである。発刊された当時は、当県教育界においても注目されることはなかったが、その数年後から満州事変、五・一五事件、国際連盟脱退、二・二六事件、日中戦争、国家総動員法の制定といった展開のなかで、学校教育が極端に愛国心を植えつける教育や軍国主義的教育に傾斜していくと評価されるようになる。そして彼は当県教育界の中核へと転ずるのである。ここで注目すべきは、新教育指導者としての今宮と、その後の日本主義教育指導者としての今宮といった二つの思想の転換期である。新教育指導者たちが、1932（昭和7）年²⁸ごろから日本主義・国粹主義的教育に迎合・癒着していった潮流は全国的に見られるが、今宮の場合はその4年前に『純粹日本教育原理』を著し、日本独自の思想に立脚した教育思想こそ日本の教育が進む道だと強調したのである。茨城教育会の機関誌『茨城教育』を概観すると、大正末期からその1929（昭和4）年までの間に水戸学に関する論文が掲載されていないので、当県教育界に水戸学的徴候が恒常的、またはその時期に活発になっていったという背景は考えにくい。したがって、今宮の日本主義的教育観の形成は潮流に乗ったものではなく、個人内における思想の転換、もしくは何らかの素地があり接続性のあるものだったのかを解明する必要がある。今後の課題としたい。

注・引用文献

- ¹ 黒田正「茨城県」、小原國芳編『日本新教育百年史』第4巻、「関東」(玉川大学出版部、1969年)、p. 28. pp. 50-54.
- ² それらは、中野光著『大正自由教育の研究』(黎明書房、1968年)、久保義三著『新版昭和 교육史-天皇制教育の史的展開-』(東信堂、2006)、山田恵吾著『近代日本教員統制の展開-地方学務当局と小学校教員社会の関係史-』などに詳しい。
- ³ 久保義三、同書、pp. 187-202.
- ⁴ 中野光、前掲『大正自由教育の研究』、pp. 253-256.
- ⁵ 県西地区において活発に行われた綴方教育運動は、体験にもとづいた児童詩運動ではなく、文学にもとづいた児童詩運動だった。したがって、当局からあまり危険視されなかったが、東北地方を中心とした1937(昭和12)年の綴方教師一斉検挙の流れを受けて、当県の綴方教師達も次々に検挙され、その運動は完全に途絶えた。
- ⁶ 茨城県教育会編『茨城県教育史・上巻』(茨城県教育会、1958年) pp. 763-764.
- ⁷ これについては、志村廣明「茨城における『自由教育』抑圧事件-1920年代初頭に手塚岸衛が遭遇した事件をめぐって-」『教育学研究』、第49巻第1号(1982年3月)、pp. 120-129. や、池田元『大正「社会」主義の思想-共同体の自己革新-』論創社、1993年(同書「第三章 大正期の民力涵養運動と自由教育論争-共同体経営と自己革新の位相-」、pp. 31-177. などに詳しい。
- ⁸ それらの題目は次の通りである。「予が自由教育観」師範学校付属小・若月秀吉、「自由教育の是非」女子師範学校付属小・中川清喜蔵、「神聖の賜蓋と自由教育」猿・桜井小・村山英夫、「児童本来の性質より見たる自由教育」新・土浦小・高野浩、「自由教育の前に」東・竹原小・菊池勝男、「生ある人間に！我教育者諸君へ！」東・橘小・立川千代吉、「自由教育雑感」真・真壁小・石堀時三郎、「綴方教授上の自由発表主義に就て」東・堅倉小・高崎政太郎、「所謂自由画教育の教育的批判」女子師範学校・杉原豊方、「自由画教育問題」女子師範学校・大内由之助。
- ⁹ 守屋源次郎が郡視学会議において訓示した内容である。「いはらき」、1922(大正11)年1月17日~23日。
- ¹⁰ 「いはらき」、1923(大正12)年12月14日。
- ¹¹ 「いはらき」、1923(大正12)年12月19日。
- ¹² 「いはらき」、1923(大正12)年12月23日。
- ¹³ 志村廣明、前掲、p. 122.
- ¹⁴ 志村廣明、同上、p. 122.
- ¹⁵ 澤柳政太郎「欧米教育の趨勢を論じて我國の教育に及ぶ」、『茨城教育』第465号(茨城県教育会、1923年5月1日)
- ¹⁶ 飯塚巳代次「低学年に於ける体験教育」『茨城教育』第516号、(茨城県教育会、1927年8月1日)、pp. 2-12.
- ¹⁷ 高橋熙「体験教育の理論及實際」『茨城教育』第521号、(茨城県教育会、1928年1月10日)、pp. 6-15.
- ¹⁸ 高橋熙「体験教育の理論及實際」『茨城教育』第523号、(茨城県教育会、1928年3月20日)、pp. 27-37.

- ¹⁹ 高橋熙「我等の個性教育論」『茨城教育』第526号、(茨城県教育会、1928年6月20日)、pp. 3-12.
- ²⁰ 加藤・市毛・宮田・浜口・室町・大瀧「個性尊重及職業指導に関する講習会報告」『茨城教育』第521号、(茨城県教育会、1928年1月10日)、
- ²¹ 小松崎軍次「高等小学校の体験教育」『茨城教育』第526号、(茨城県教育会、1928年6月20日)、pp. 13-22.
- ²² 高橋熙が県視学に抜擢された後に、稲敷郡金江津小学校の校長になる。さらに、戦後になってから「茨城教育」や「日本新教育百年史」の茨城県を担当執筆し、茨城県における新教育運動について語るようになる。
- ²³ 田島体験学校長。入澤の指導を受けながら体験教育を推進した人物。
- ²⁴ 黒田正「茨城県」、小原國芳編『日本新教育百年史』第4巻、「関東」(玉川大学出版部、1969年)、pp. 26-28.
- ²⁵ 黒田正、同上、p. 51.
- ²⁶ 豊崎 卓編『この道を行く - 今宮千勝先生伝 -』(今宮千勝先生小伝刊行会、1974年) p. 71.
- ²⁷ 今宮千勝「郷土教育(水戸学を基盤として)百年史」、『茨城教育』第733・734合併号(茨城県教育会、1969年2月) pp. 32-39.
- ²⁸ 自由教育は、1925(大正14)年に成立した普通選挙法と抱き合わせて成立した治安維持法[これについては久保義三、前掲『新版昭和教育史 - 天皇制の教育の史的展開 -』または中村隆英著『昭和史』(東洋経済新報社、2012)に詳しい]によって体制的な思想に従った自由教育実践か、または反体制的な思想の自由教育実践かの岐路に立たされたようである[中野光『大正自由教育の研究』(黎明書房、1968)]。しかし、入沢宗寿『日本教育論』、『日本精神への道』[1934(昭和9)年]、『日本教育学』[1939(昭和14)年]、近藤壽治『日本教育学』[1935(昭和10)年]、福島政雄『日本教育論』[1936(昭和11)年]、『日本教育原論』[1939(昭和14)年]、海後宗臣『翁問答と日本教育論』[1936(昭和11)年]、乙武岩造『日本教育学の枢軸』[1939(昭和14)年]、海後勝雄『東亜民族教育論』[1942(昭和17)年など、日本主義的教育論が出版されるようになったのは、1932(昭和7)年ごろからである。「国民教育」に関する著作は、吉田熊次『国民理想と教育』[1935(昭和10)年]、石山脩平『国民教育要論』[1941(昭和16)年]、小林澄兄『国民教育学』[1941(昭和16)年]、小西重直『国民教育と親心』[1941(昭和16)年]、『国民教育の基本的研究』[1942(昭和17)年]などが挙げられる。

